

## 教育実習指導の手掛かりについての考察 1

### — 現場教師の助言を生かした指導 —

#### *Consideration about the key of instruction of practice teaching 1*

#### *— Instruction which employed advice of teachers at schools —*

安部 孝 Takashi Abe

(人間発達学部)

野倉 有香 Yuka Nokura

(名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園)

#### 【キーワード】

教育実習 現場教師 振り返り 隣接領域

#### 【要旨】

本研究では、教育実習や教師としての専門性の向上を目指すための自己課題設定に有効な指導の手立てについて考察した。考察に当たっては、本学部の学生が2年次に実施している附属幼稚園における教育実習の、事前・事後指導における現場教師の助言が、実習生の実習後の振り返りの中でどのように生かされ、認識されたのか、そして今後の実習や専門性の向上を目指す自己課題にどの様に反映されたのかについてアンケートを基に検討した。また、より、学生から専門者への成長変容という観点で考察を深めるために、同幼稚園の初任教師の振り返りを考察に援用した。その結果、実習生は実習前には子どもに関する知識やかかわり方について関心があり、それらについて受けた指導内容を実際に経験し、確認していることが分かった。しかし、実際に実習を通して学び経験したことや抱いた悩みや課題もあり、それらには事前に予想できないことや、現場教師の助言によって、とらえなおすことができることなどがあった。検討を通して、実習指導において、事前・事後に現場教師と実習生が課題を確認し合ったり、共に振り返ったりする機会を設けることは有効であり、実習生が、園の生活や人間関係、そこに積み上げられ、展開している日常の様子に着目し、それらを理解すると共に感じ取ることを大切にするような指導が必要であると考えた。

### 1 はじめに

保育者養成において、教育・保育実習（以下、教育実習）の指導と実施運営は、課程の運営と、学生が出口（卒業・就職等）に向けて専門性を身に付けるという意味において重要な取り組みである。また、学生（以下、実習生）においては、実習に臨むに当たっての準備や実際の実習・学習活動、振り返り（評価）という流れと、そこから描かれる自己課題が専門性の獲得をより確かなものにしていくものと考えられる\*1。

教育・保育現場（以下、教育現場）で実習が行われている期間の保育室では、実習生にとっては実習が、同時に子どもと教師との関係においては保育が行われ、それぞれが成立していると考えられる。つまり、保育という日常の中で実習という場が構成され、実習という立場から保育を眺め、保育という立場から実習を眺めているのである。その意味で、実習生と教師との間に融通し、共有される保育に対する理解や感覚が存在すると推測することができる\*2。そしてそのことは、実習生が教師・保育者（以下、教師）の考えや感じ方を知ることで教師のように保育を理解し、実習生である自己を振り返ることができるとい

う可能性を認め、同時に期待することであると考える。しかし、保育者養成における段階では、そうした実習生と教師の共有し得る内容の具体について十分に推し量ることは困難であり、したがって、実習生の実習後の認識の変容をそうした経験を踏まえた上で理解すること(自覚するという事)も困難である。

そこで、本研究では、本学部の学生が2年次に行っている附属幼稚園における教育実習の、事前・事後指導での現場教師の助言が、学生の実習後の振り返りの中でどのように生かされ、認識されたのか、そして今後の実習や専門性の向上を目指す自己課題にどの様に反映されたのかを検討したいと考える。実習生において「そうだった」と納得・理解され、さらに実習生の課題意識を高める教師の指導や助言に着目し、また、自分なりの意義を感じ、必要性を抱いた課題とは何かを知ることによって、有効な実習指導の内容を工夫する手掛かりを得ることができると考える。

また、先述の実習生と教師が共通理解することを、実習生に、より隣接した立場から理解するために、初任教師が着任半年後に実習生と同様の内容について振り返った記述を考察の手掛かりとして用いる。初任教師は実習生ではないが、これまで専門職としての背景をもたない者が専門職の立場に立つことによって、専門職としての必要感やそれまでの学習の意味

\*1 野田は、保育所・幼稚園の生活では、「そのすべてにおいて保育者と子どものかかわりがある」とし、「そのかかわりは、『その時』の保育者の判断に委ねられている」と述べている(野田美樹「第8章 記録・反省・評価から再立案へ」豊田和子・新井美保子編著『保育カリキュラム論』建帛社、2013年、pp117-127.)。そして保育はこうした「保育者の瞬間的な判断の積み重ねで」成り立っており、それゆえ、保育後に「ゆっくり振り返る」ことから「明日の保育につながる反省を見つかることができる」としている。野田によれば振り返り(記録・反省・評価)とは、「より良い保育への道しるべとなり、保育の質を高めることにつながっている」と意味付けられる営為である。また、野田は、「その時」について、「子どもは『その時』何を成し遂げたかったか」を振り返る視点と述べており、この意味で、事後に、過去の生活における判断、つまりその時々々に生活していたことを改めて反省することを通して、自己とそこに生活していた他者である子どもや教師の思いや判断を理解することができるのだと考えられる。しかし「その時」とは、自己も他者もまさに“只中”でかかわる「時」であり、そこで現実として“あった・なされた”心情や判断を同時に俯瞰したり、客観的に認識したりすることは困難であるとも考えられる。したがって、(現在においてはすでに過去となった)「その時」の心情や判断をリアルに振り返り、共感することも困難であることになる。このことは教育実践の振り返りや反省を行う際に慎重に考慮すべき課題と考えられる。

\*2 共有される保育に対する理解や感覚とは、教師と実習生と子どもたちが、その時にその場において、共に保育という生活の中にある(そのことが前提となる)という意味ととらえる。

草信は実習における学びについて「実習の只中において実感すること」と表現している。「特に子どもたちとの生活の部分は、幼い子どもの生体リズムに沿ったものとなり、そのリズムになじむことから、子ども理解を始めていくことができるのです」と述べている(草信和世「第4章 幼稚園実習への準備」諏訪きぬ編著『幼稚園実習ガイドブック-実習の中で磨かれる“技と心”-』新読書社、2009年、pp58-61.)。生活の中にあるリズムとはまさに生活の中で、その生活になじむことであり、なじむとはそのことそのものに対する違和感が薄れ親しむことである。そして、それは当初非日常の生活の只中であつた自分が、その生活を自分の生活として送るようになることである。そしてそのような、身体だけでは無い自身の生活すべてのとらえ方を「子どもの生活を支えるためになされる、さまざまな援助に具体的ふれ、自身もしてみることを通して、幼稚園生活のもつ生活文化を習得することも行われるでしょう」と表している。この意味で、教師は実習生に、子どもが生活するための援助を工夫することを指導するが、子どもの生活の成立においてまさに(そこにいる教師や実習生である)自己もその生活を送っているのであり、子どもとの生活の内側において、生活の成立の意味やその構成・構築について理解しているのだと考えることができる。

の理解をどの様に抱くのかに着目することで、考察の手掛かりにしたいと考える\*3。

## 2 研究の目標

教育実習や教師としての専門性の向上を目指すための自己課題設定に有効な指導の手立てについて、実習生と初任教師の振り返りをもとに検討する。

## 3 方法

名古屋芸術大学人間発達学部2年生（以下、実習生）が取り組んだ附属幼稚園教育実習の、事前と事後の振り返り・調査をもとに、事前、事後指導の内容が活かされたり、実感できたり、自己課題の設定に役だったりしたことを整理する。また、専門家として歩み出した初任教师N（過渡期であり、実習生にとって隣接領域にある存在と理解する。隣接する別領域なのか、または延長上にある区切られた領域なのかはここでは問わないこととする。）の、専門家としての振り返りにおける理解や課題意識を探り、前者と比較することで検討の手掛かりとする。（初任教師は附属幼稚園所属であり、実習生とは異なる立場で同じ保育環境にあり、また、教師として実習生の指導に当たり、本研究の考察の有効な手掛かりになると考える。）

そして、実習生が教師の指導助言を手掛かりに理解する内容や質についての検討を通して、教育実習指導の手立てとしての教師（学習に活用できる比較的身近な存在としての隣接領域）の指導や助言の効果的なあり方（生かし方）について考察する。

\*3 寺島らによれば、新人保育士に影響を与えていることとして先輩保育士の存在をあげており、「新人保育士の成長は、先輩保育士からのアドバイスや気づきを得て、保育を振り返ることができるようになり、その結果自分自身の保育の考えや思いを構築していくことができるのであろう。つまり保育士が育つためには、先輩保育士が頑張っているところを認めながら、肯定的な話し方で保育を行っていくよう援助することが大切であると言えよう」と述べている。（寺島明子、大野和男、青柳静花、横山いずみ『3年目の保育士によるクラス担任としての子どもの見方』『松本短期大学紀要19号』松本短期大学、2010年、pp81-93.）つまり、新人保育士が専門家として保育観や思いを構築し得るための環境の最大要因は、専門家である先輩の存在であり、肯定的な援助や助言と理解することができる。その意味で、専門者を育成する問題とは、育成に関係する者の保育観や関係性構築にかかわる質的な問題ととらえることもできる。また、このことから、初任教師や実習生が、教育現場での学習経験をともに専門家としての資質を向上させていくためには、“実際そこにかかわっていた”教師たちの適切な援助や助言が有効な手掛かりになると考えられる。

仲野・金武らは、「新任保育者における1年間の園内研修を終えて」（『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』岐阜聖徳学園大学短期大学部、2011年、pp103-116.）において、新任保育者を「養成校を卒業して保育者となるキャリア移行期」（同、p115.）と表現している。そして高濱の見解（高濱祐子『保育者としての成長プロセス』）を引きながら「保育者の熟達化の中で、幼児の理解や指導方法についての知識の獲得が必要条件とするならば、経験によってそれらの豊富な知識が構造化される事が十分条件としている。今後、新任保育者は多くの経験を積み重ねながらも、その場その場の対応の仕方を選び取っていく力量が求められる」と述べている（同、p115.）。この意味で、知識の構造化のための経験が必要であり、その経験の質が専門的力量につながるが、経験が「その場その場対応の仕方を選び取っていく」ことだとすれば、専門家としての判断能力がどのように、専門家として「熟達化」のプロセスにおいて向上するのか（し得るのか）という課題が立ち上がってくるのだと考えられる。つまりこの経験の違いや専門的な判断のあり方が、教師と実習生、熟達者と初任教師との違いとして表出するのだと考えられる。

## 4 内容

### 4-1 学生の振り返り (調査)

#### 4-1-1 授業について (平成 26 年度 前期)

授業名 幼稚園実習指導 (基礎実習 - 附属幼稚園実習事前事後指導)

指導内容は、おおむね次のとおりである (本学, 2014 年度シラバスより)。なお, 事前指導, 事後指導の下線部の各回に, 現場教師の助言が取り入れられた\*4。

◆授業の到達目標およびテーマ

附属幼稚園・滝子幼稚園で行う幼稚園実習 (1 週間) のための, 事前・事後指導を目的とする。  
1 週間の幼稚園実習においては, 「園を知る・子どもを知る・保育者を知る・園務を知る」ことなどを主たるねらいとする\*5。  
それらを, 子どもとのかかわりを通して理解し, 自分なりの学習課題を見出せるようにする\*6。

◆授業の概要

下記に示すように, 「事前指導→実習→事後指導」というサイクルで, 授業を展開する。事前指導では, 幼稚園実習に対する基本的姿勢を, 事後指導では, グループに分かれて振り返り活動を行い, 仲間と保育について学び合う。  
又パネルシアターを各自作成し発表をすることで, 保育技術の向上を目指す。

◆授業内容と計画

事前指導	(1) 実習日誌をつくる。(2) 課題について知る。(3) 教頭先生のお話を聞く。 (4) 附属幼稚園を見学する。(5) 記録のとり方を学ぶ。 実習 1 班が出かける。(他の班は保育教材づくりを進める) 2 班が出かける。(〃) 3 班が出かける。(〃) 4 班が出かける。(〃) 5 班が出かける。(〃)
事後指導	(1) 記録をもとに, 班に分かれて振り返り活動を行う。 (2) 班での振り返り活動を発表する。(3) パネルシアターの発表会をする。 (4) パネルシアターを使い, 即興的にお話遊びを展開する。 (5) 班ごとでパネルシアターの発表会をする。

\*4 平成 25 年度担当である南は, 「前期・後期の授業終了時に, 幼稚園の先生方と実習担当教員で反省会を設けた」中で, 「実習ファイルの綴じ方や, 一日の保育を振り返る幼稚園教諭と実習生との反省会のあり方など, 幼稚園側からは, 実用的で有益なアドバイス」を得ることができたと報告している。そして, 今後の課題として「学生がクリエ幼稚園で得た実践知識を, どのように継承していくかを探ること」とし, さらに「実習中だけでなく, 学生が幼稚園の活動の補助や補助的作業に参加させていただいたり, 実習授業の中でこれまで以上に, 幼稚園の先生方に授業にお越しいただく等して, 幼稚園と学生の交流を図りながら学んでいきたい」と述べている。(南元子「特別寄稿『附属クリエ幼稚園での基礎実習の取り組みについて』」『平成 25 年度名古屋芸術大学クリエ幼稚園研究紀要 保育のまなざし 第 1 号』名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園, 2014 年, pp46-52。)事後の情報交換を通して養成校が学ぶことはおよそ, 学生の様子であり南が述べる指導内容としての「実用的」な部分と考えられる。いわゆる, 実習を適切に送るための実用的内容であり, 学生理解 (情報) である。しかし, 実習という生活の中で「一日を振り返る」際の理解や心情, そしてそれらを課題化する前のリアルな自己 (実習生自身と教師自身) の出来事と受け止めはこうした情報にはなりにくく, その意味でそのことを養成の指導内容に取り入れられたり, 反映したりして再構成することは不可能である。したがって, この当事者のかかわりを生かした振り返りを授業の中に取り入れていく工夫が必要 (有効) であると考えられる。

\*5 特に, 参与的, または部分実習的な取り組みを目的とはしないが, 事前指導において, そうした場面を, 附属幼稚園の担当教師との相談によって行うことも可能であることを伝え, 読み聞かせや手遊びなどを行っている学生もいる。

\*6 これまでも保育者養成校で実習指導にかかわってきた著者の経験の中で, 附属以外の幼稚園で実習を行った際に, いわゆる, 距離をおいて観察している実習生の姿が, 自らかかわる意欲に欠ける消極的態度と評価されることがあった。そこで, 事前指導では, 担当教師と相談の上で, 子どもたちと話したり遊んだり, 一緒に活動するなどのかかわりを通して (参与的, 参加的), 実習目的にある事柄の理解に努めるように指導を行ってきた (かかわりを通じた観察実習)。

#### 4-1-2 振り返りについて

実施日：平成 26 年 7 月 1 日（火） 学生：45 名参加（回答 45 名）

学生は、幼稚園教諭免許、保育士資格の取得を目指しており、大学入学後、教育（保育）実習に臨むのは初めてである。

「問い」は、以下に示した 3 つで、回答は自由記述による。

現場教師を招いて事後指導を行った後に振り返り（調査）を行った。

#### 4-1-3 内容

「問い」に対する回答について、類似する内容ごとに分けた。1 つの文章が複数の内容に該当する場合もある。

##### (1) 問いと回答

【問い A】：事前指導で S 先生・H 先生のお話を伺いました。役だったこと、実習で「ああそうだな」と感じたり、学習や具体的な気づきに生かしたことを書く。

##### 【内容の分類】

※（ ）は人数

No.	内 容 (実数)	No.	内 容 (実数)	No.	内 容 (実数)
①	アニメのキャラクターに関心をもっておく (7)	⑥	実習中、子どもとのかかわりで困ったこと (5)	⑪	子どもに対する言葉遣い (8)
②	子どもと接するときの姿勢 (2)	⑦	事前指導を受けて、改善できたこと・学んだこと (31)	⑫	子どもの表情や反応 (11)
③	子どもの成長を見守る・観察する (11)	⑧	園児の名前を呼ぶこと (3)	⑬	子どもに対する実習生の反応 (6)
④	子どもの成長について感じたこと・分かったこと (11)	⑨	年長児・年少児の生活の様子について (13)	⑭	子どもとかわったときの感想や気づき (14)
⑤	実習生としての自覚をもつ (4)	⑩	成長（段階）の変化 (7)		

##### 【分類ごとの主な記述内容】 ※下線部は他の分類に共通する内容 ※（ ）内の数字は共通する分類の No.

No.	記述（一部抜粋したり、類似する表現をまとめたりした）
①	<ul style="list-style-type: none"> <li>■「妖怪ウォッチ」を見ておくといいと言われたので、放送されているアニメを見てから実習に臨んだ。想像以上に子どもたちの間で流行していて、<u>アニメの話をして子どもたちと楽しむことができた (14)</u>。</li> <li>■「妖怪…」について伺っていたので、事前に情報収集ができた。</li> <li>■今、子どもたちの間で人気のあるものなどについて教えていただき、予習して実習に臨むことができた。</li> <li>■今の子どもたちは何が好きで興味をもっているかなど、小さい子とかかわる機会が少なかったのができてよかった。</li> </ul>
②	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ふとした瞬間、猫背になってしまったところ、子どもたちに指摘されてしまいました (13)。事前指導で猫背はよくないといいただいたにもかかわらず…。</li> <li>■子どもたちを見るとき姿勢などはとても勉強になり、<u>次への行動がとりやすく、視野を広くもつことができました (7)(14)</u>。</li> </ul>
③	<ul style="list-style-type: none"> <li>■全部に世話を焼くのではなく、遠くから見守る、補助するのが大切だと気付いた。</li> <li>■見守り、観察することで、子どもたち一人一人を見ることができ、また見守り、観察することの大切さを<u>実践的に考えることができた (14)</u>。</li> <li>■「一歩下がって見守る（観察する）」というのがためになった。</li> <li>■子どもをよく観察する (12)。(そのために、もしくはそこで) <u>名前と顔を覚える（呼ぶ）(8)</u>。</li> <li>■(年長児は自分でできるので) 私たちは、そのやることを見守るという感じでした。見守るのも大事な役目。</li> </ul>

No.	記述 (一部抜粋したり, 類似する表現をまとめたりした)
④	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもも一人で行えるようになると分かった。</li> <li>■年長さんは何も言われなくても、自分たちでやっていた (⑨)。</li> <li>■3ヶ月離れている子同士で、発達段階がとつても大きく違ってくるのが、<u>実習を行うことで分かった (⑩⑭)</u>。(1歳という年齢の差が…)</li> <li>■(食事, 食べ方, 箸の持ち方など) 基本的なことをこの時点から身に付けることが大切だと思った。</li> <li>■私たちが声をかけなくても、子どもたちは理解して行動していた (⑫)。</li> <li>■字が書ける子やまだ書けない子など、個人差があると感じた。</li> <li>■(月齢の違いによって) 身体の高さや成長の度合いが違う。</li> <li>■成長しているところ、できないことやできることを見極めることが大切。</li> <li>■かわいいけれどあんまりかわいいとは言わない方がいいと思った(同じ人間で、動物を見ているのではない)(※教師から教わったこと)</li> </ul>
⑤	<ul style="list-style-type: none"> <li>■自分の行動が見られているという自覚をもつ。</li> <li>■(子どもに対して) 遊びのとき以外は実習生という自覚をもって臨むことができた。</li> <li>■否定的な言葉は使わない。</li> <li>■ゆっくり、はっきりと、短く話すことが大事 (⑪)。</li> </ul>
⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>■大勢の子どもに「遊ぼう」と言われて対応に困った (⑬)。順番に遊んだ。</li> <li>■(年少の子どもに)「やって」と言われ、「手伝ってあげるから一緒にやろう」と言っても、全部やってほしいようで、一緒にやるということが難しかった。</li> <li>■「それはダメだよ」(と否定的な言葉)で言ってしまった (⑫⑬)。</li> </ul>
⑦	<ul style="list-style-type: none"> <li>■(子どもを見るとき姿勢を教わって) 次の行動がとりやすく、視野を広くもつことができた (⑭)。</li> <li>■(事前に教わったように) きちんと目を見て子どもたちに「じゅんばんこね」ということができ、その場をスムーズに収めることができた。</li> <li>■子どもたちに「かわいい」などとあまり言わない方がいいということ (⑪)。</li> <li>■自分にべったりついてくる子を友だちの場所に自然に戻してあげることを伺い、実際にそのことが大切と思った。</li> <li>■「褒めること」が大事と伺い、実際そうすると、子どもたちはにこっと笑って次も頑張ろうと思うような顔になって、「褒めることが大事」ということが分かった (⑫⑭)。</li> <li>■(年長で) 作品を作るときに(実習生が)手を加えないこと。</li> <li>■子どもたちにどこまで手助けをすればよいか少し分かった。</li> <li>■(砂場で遊んでいて、話をしているとき…事前指導で) ゆっくり、はっきり話すことよいと聞いていて、「こういうことか」と思った。</li> <li>■早口になってしまったとき子どもたちに伝わらないことがありました。教えていただいたことを思い出して落ち着いてゆっくりと話すことができた (⑪⑫)。</li> <li>■何人かの子どもたちに「あそぼ」と言われたときの返し方(対応, 受け答え)を伺っていたので実際にできた。</li> <li>■(園児一人一人への対応で、きりがなくなること…) 極力折り紙などをするときはみんなと一緒にやってあげるようにしたので混乱せずにすんだ。</li> <li>■「積極的に子どもたちとかかわってほしい」「子どもたちととにかく元気いっぱい遊んでほしい」と言われ、そのようにできよかった。</li> <li>■(年少の子どもの中で、排泄や言葉についての実態を聞いていたが…) ちょっと不安だったが、そうしたことも身振りなどを交えて話せてよかった。</li> <li>■事前指導で二人の先生が今の子どもたちの様子や子どもへの寄り添い方を話してくれたので、イメージをもって実習に臨むことができた。</li> <li>■給食中に走り回っている子がいたらどう声掛けすればよいか教えていただいた。実際にそういう場面で焦らずに対応ができた。</li> <li>■「大人が楽しければ、子どもも楽しい」と伺っていた。本当にそのとおりだと思った。私が笑うと子どもも笑い (⑫), 自分に共感してくれるんだと思った (⑬⑭)。</li> </ul>
⑧	<ul style="list-style-type: none"> <li>■園児の名前を覚えて、名前を呼んで話し掛けること。</li> <li>■名前と顔を覚える (③)。</li> </ul>
⑨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■年長児は小学校への進学に向けて時間・食事マナー・身だしなみについて考慮した指導を行っている。</li> <li>■年長児は何も言われなくても自分たちでやっていたので、身の回りのこと・自分のことは自分でできると思った (④⑭)。</li> <li>■特に年長児には自分たちだけでまずやらせてみて、一歩下がってみるということを教えてもらった。</li> <li>■年長児には「一番大きい組だから…」という自覚が見られた。</li> <li>■(年長児の) 普段あまり話さない子でも、年少児とのかかわりでは、年少児を一生懸命リードする姿が見られた。</li> </ul>

No.	記述 (一部抜粋したり, 類似する表現をまとめたりした)
⑪	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ (園児の名前を呼ぶ…) 呼んだ方が反応が返ってくるが多かったと思う。</li> <li>■ 子どもにあまり「かわいい」といわない。(子どもの行動一つ一つに「かわいい〜」と反応するのではなく、成長しているところや、何かができたことを見極めることが大切。実際に実習ではそのように気を付けてとらえた)</li> <li>■ 否定的な言葉は使わない。こうすればよいことを言う。そしてできたら褒める。</li> <li>■ 「それはだめだよ」と言ったら、不安そうにしていたので「しまった」と思った。</li> <li>■ ゆっくり、はっきり、短く話す。</li> </ul>
⑫	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 子どもたちが甘えてきて「これやって」と言われた。</li> <li>■ 子どもたちは褒めると、にこっと笑って、次も頑張ろうというような表情をする。</li> <li>■ 褒めてのばすことは子どもにとっては大きな自信につながると思った。</li> <li>■ (年長児に) 全部世話を焼くのではなく…。</li> <li>■ 実際に一人一人の子どもたちが何をしたいのか、何を見ているのかをとらえられなければならないと感じた。</li> <li>■ 目線を合わせて話すことが重要だと感じた。そうすることで(立って聞いたり話をしようとしているときよりも) ゆっくりははっきり真剣に伝えようとしてくれた(⑭)。</li> </ul>
⑬	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 猫背になってしまったところを子どもに指摘された(②)。</li> <li>■ 大勢の子どもに一齐に「遊ぼう」と言われ、正直とても対応に困った(⑥)。</li> <li>■ (砂場で遊んでいたときに) ゆっくりははっきり話すよいと聞いていたので、こういうことかと思った。</li> <li>■ (成長の度合いについて) 実際に(保育現場に)入ってみて本当にそのとおりだと思った。</li> <li>■ 「名前を覚えて呼ぶ」ということについては、実践してみると子どもたちがとても喜んでくれて「なるほどな」と感じた。</li> <li>■ 「それはダメだよ」といってしまって不安そうな顔をしている子どももいたのでしまったと思った(⑫⑯)。</li> </ul>
⑭	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 一人の子とばかり遊んでいると、その子だけが楽しんで遊ぶということになるのでいけないと思った。</li> <li>■ みんなで楽しむことが大事だと思った。</li> <li>■ いろいろとやっていて「褒めることが大事」だということが分かった。</li> <li>■ 遠くから見守り、補助するのが大切だと気付いた(③)。</li> <li>■ (年長児は) ほとんど自分でできるんだと思った(④⑨)。</li> </ul>

(2) 問いと回答

【問いB】：事後指導・本時(7月1日)で、H先生・N先生のお話を伺いました。  
自分の振り返りに役だったこと。また、新たな気づきを書く。

【内容の分類】

※( )は人数

No.	内容(実数)	No.	内容(実数)	No.	内容(実数)
①	子どもがケガをしたときの対応・反省について (11)	⑤	記録の書き方について (3)	⑨	実習中教師から学んだこと (12)
②	子どもと接するときの姿勢 (11)	⑥	園児への配慮について気付いたこと (12)	⑩	実習を終えて気付いたこと (4)
③	子ども同士のケンカの対応・反省について (7)	⑦	今後の実習で生かしていきたいこと (4)		
④	部分実習での反省点 (2)	⑧	事後指導で学んだこと・感じたこと (8)		

【分類ごとの主な記述内容】 ※下線部は他の分類に共通する内容 ※( )内の数字は共通する分類のNo.

No.	記述 (一部抜粋したり, 類似する表現をまとめたりした)
①	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 何事にも、報告連絡相談が大切ということに気付いた。</li> <li>■ ケガをしたときの対応や、保護者や病院への連絡や子どもへの手当などについて知ることができた。</li> <li>■ 保育室を抜け出してしまう子どもへの対応について、担任が保育室から出るということに関する大きな選択なのだろうと感じた。</li> <li>■ 保育者同士のコミュニケーションの大切さを感じた(⑧)。</li> <li>■ トラブルがあった場合は、自分一人で判断せずに、先生方に相談し対応する。</li> </ul>

No.	記述 (一部抜粋したり、類似する表現をまとめたりした)
②	<ul style="list-style-type: none"> <li>■座っているときにすぐに立ち上がれる体勢ではなかった。子どもへの対応のために気を付けなければならないと思った(ということ教わった)(⑧)。</li> <li>■自分の食事中の姿勢ができていなかった。</li> <li>■報告が大切で、クラスを任されている責任をもつこと(安易にその場を離れない)(③)。</li> <li>■座り方や話すときの目線、園児への配慮を常に意識すること(⑥)。</li> <li>■一人一人の変化に気付くこと。命をあずかっているという責任について考えた(③⑥)。</li> <li>■子どもがケンカしたときに、子どもの話を理解したり共感したりする力が足りなかった。また、どうしたの?と聞いて、子どもから何かを言い出すのを待てばよかった。自分が見たことで、先に「なぐっちゃったね。痛いよね」と言ってしまったことがいけなかったと反省した(③)。</li> <li>■ケンカの仲裁をするのが難しく、先生に任せきりになったことを反省している。</li> </ul>
③	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どものケンカは、一見暴力をふるった側だけが悪く言われがちだが、その原因となる事情があり、双方の話聞く必要があると思った。</li> </ul>
④	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもに合った絵本を選ぶなどの配慮が必要。このことで失敗したので今後気を付けたい。</li> <li>■自分の本の読み方が未熟と感じた。</li> </ul>
⑤	<ul style="list-style-type: none"> <li>■記録の書き方はそれぞれの園によって異なる。</li> <li>■「始末する」「片付ける」など記録に用いる言葉について、状況や園の指導によって使い分けることを伺った(⑧)。</li> </ul>
⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもが見慣れない大人(実習生)に対してとる反応や、それに対する大人の対応を考えることができた。</li> <li>■一人の子どもを抱っこしたら、ほかの子どもたちもやってほしがってしまった。</li> <li>■常に子どもに寄り添うことの大切さ、手を差し伸べることで与える安心感の大切さに気付いた。やってあげるのではなく、一緒に行動していくことの大切さに気付いた(⑩)。</li> <li>■様々な視点で子どもを見ることの大切さを学んだ(⑧)。</li> <li>■大人の考えを押しつけてしまい、子どものやりたいという気持ちをつぶしてしまいそうだったので、子どもの気持ちを受け止めて理解してあげたいと思った。</li> <li>■自分から子どもたちに歩み寄ることが大切ということ。</li> <li>■給食のときにこぼしてしまう子がいたが、見守ることが大切だと知った。</li> <li>■常に緊張感をもち自分から行動することの大切さ。</li> <li>■子どもに直接的な指示をする前に、今は何をやる時間かを子ども自身に考えさせることが大切と感じた。</li> </ul>
⑦	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもの気持ちを理解しつつも(要求に対して、必要に応じて)断ることもできるように心がけたい(⑥)。</li> <li>■教師に質問するということは、今後の実習にも生かしていきたい。</li> <li>■実習でどのように動けばいいのか、今の幼稚園の子どもたちの様子など事前に聞くことができてよかった。</li> </ul>
⑧	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもの可愛さについて教師たちが話していて、改めて教師の仕事の魅力を感じた。</li> <li>■自分もこの仕事を選んでよかったと思えるような教師になりたいと思った。</li> <li>■「実習中でも何かあったら聞いてもよい」と伺った。実際、子どもがケンカをする場面に遭遇し困ったが、その時々でこれからは相談したいと考えた(③)。</li> <li>■どんな状況であっても、優しさ、冷静さを保つことが必要だと感じた(①③)。</li> <li>■実際にかかわった子どもたちが、どんな考え方でどう成長したのか知ることができた。</li> <li>■「先生嫌い」と言われ落ち込んでいたが…(そういうことを言われることは教師でもあり、次の日にはまた子どもは寄ってくる)…先生の話を伺い、落ち込まずに頑張ろうと思った。</li> <li>■常に緊張感をもつこと。(ケンカ、ケガについては必ず報告すること)(①③)。</li> <li>■自分の振り返りには、メモを取るが必要だと思った(⑩)。</li> <li>■ケガはどの子にも起こり得ることで、その後の対応をしっかりすること(の大切さ)を学んだ(①)。</li> <li>■子どもたちのためにもっと何かできたことはないかと考えました。</li> </ul>
⑨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもが服を汚したときに着替えさせてほしいといわれていたが、子どもの方から言って来られて嬉しかった。</li> <li>■子どもたちはあまり覚えていないと先生は話されたが、やはり、すべての子どもたちにかかわっていけるようになろうと思った。</li> </ul>
⑩	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どもは日々成長している。</li> <li>■実習生を、先生というよりは、遊んでくれるお兄さんやお姉さんとしてとらえていると思った。</li> <li>■トラブルがあったときはまず、子どもが不安にならないようにし、教師に知らせる(①)。</li> <li>■同じクラスでも、子どもの姿(話す、話さないなど)が様々で、個々に応じた対応が必要と感じた。</li> </ul>



No.	記述（一部抜粋したり、類似する表現をまとめたりした）
ほか	<ul style="list-style-type: none"> <li>■（自分が入ったクラスの子どもたちが）変わらず元気だと聞くことができた。</li> <li>■実習初日などでは、覚えることや不慣れな作業のために、楽しんで行う事を忘れていましたが、二日目、三日目になるにつれて、（新たに）覚えることが減った分、気持ちも落ち着き、楽しみながら実習できるようになると、子どもたちにも自分が楽しそうにしているのが伝わった気がした。</li> </ul>

### (3) 問いと回答

【問いC】：前問を受けて…これからの学習や応用実習に向けて課題として考えること。

（準備や取り組み、頑張りたいこと、やってみたいことなど）

【内容の分類】【分類ごとの主な記述内容】※下線部は他の分類に共通する内容 ※（ ）は人数

No.	項目	内 容 (実数)
①	子ども理解 かかわり 指導	■子どもの発達、実態に応じた実践 (5)
		■子どもの理解、観察 (10)
		■子どもへの対応、かかわり、指導 (15)
		■保育の流れの理解 (1)
		■子どもや教師の名前を覚える (4)
		■アニメ (1)
②	保育技能等	■手遊び、絵本、リズム、紙芝居、シアターなど (18)
		■ピアノ (1)
		■壁面装飾など (1)
③	実習態度 姿勢 取り組み	■積極的な態度、教師とのかかわり (11)
		■ケガ、ケンカへの対応（処理）報告など (5)
		■緊張感をもって臨む (2)
		■はきはき話す、表情、メリハリ (3)
		■メモを取る (1)
		■子どもや保育の学習 (3)
④	事前・日常	■指導案・記録の書き方、準備 (3)
		■準備（持ち物など） (3)
		■日常生活の態度・習慣、礼儀 (5)

## 4-2 初任教師の振り返りから

### 4-2-1 初任教師について

初任教師 N<sup>\*7</sup> は、本学を卒業後、実習園（本学附属幼稚園）に教員として就職し、年中児（名）の担任として教育に当たっている。

「問い」は、以下に示した2つで、回答は自由記述による。

#### (1) 問いと回答

【問いA】：教員として保育現場で、大学の勉強・学習で「これがこのことか」と思ったことがあるか。（「ああそうだったのか」という実感的な内容に相当）

\*7 初任教師 N：野倉有香（本稿共同執筆者。平成26年度より名古屋芸術大学附属クリエイティブ幼稚園勤務。年中児クラスを担当）野倉は、実習の事後指導（事前・事後指導の授業内）における教員による指導を担当し、実習生が幼稚園の生活の中で学んでいる姿を目の当たりにする一方で、振り返りにおいて、園（実習中）では知り得なかった、学生の気づきや受け止め、理解などを知ることとなった。「5 考察」における、教師が今後考えていくべき指導助言の視点や内容などは、こうした事情を踏まえて述べられたものである。野倉は、安部の依頼によってこの振り返りを行う段階では、本考察の目的は理解していない。

No.	項目	内 容
①	子どもの姿 子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>■平行遊びをしている子どもの姿を見たとき</li> <li>■自己主張する姿を見たとき</li> <li>■成長段階・様子（できなかったことができるようになった。何度も繰り返すことでできたことや場面）</li> <li>■教師は子どもの鑑になる</li> <li>■子ども同士のかかわりの中で、自分を抑えて相手に譲る言葉や行動</li> <li>■子ども同士のかかわりの中で、自分の欲求を抑えられない言葉や行動</li> <li>■言葉をオウム返しする子どもの様子</li> <li>■子どもたちは、今日できたことが明日もできるとは限らないということ</li> </ul>
②	指導観 教師像	<ul style="list-style-type: none"> <li>■子どものやる気は教師の働き掛けによって変わる</li> <li>■子どもが好きなだけでは、(保育は) 勤まらないが、やりがいはある</li> </ul>

(2) 問いと回答

【問いB】：初任者として子どもの前に立ったとき、必要だと思ったこと。

(「自己課題」に相当する。専門者として現実的で、切実なものと考えられる)

No.	項目	内 容
①	子どもとの かかわり 理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>■スキンシップをとる</li> <li>■お互いのことを知る機会をつくる</li> <li>■子どもの名前を覚える</li> <li>■自分の名前を覚えてもらう</li> <li>■「髪の毛切ったね」と日々の変化で気付いたことを伝える</li> <li>■好きな遊びの時間などに子どもたちと一緒に遊ぶ</li> <li>■子どもが興味をもっているものを知る</li> <li>■子どもと交わした約束を守る</li> <li>■「ありがとう」「ごめんね」を教師も伝えるようにする</li> </ul>
②	教育観 教師像 生活観 人間観	<ul style="list-style-type: none"> <li>■表情を豊かにする。特に笑顔</li> <li>■自分に自信をもって振る舞う</li> <li>■子どもが好きであるということ</li> <li>■適度な緊張感をもつ</li> <li>■言葉遣い・座り方に気を付ける</li> </ul>

5 考察

5-1 事前指導について

学生たちの、教師による事前指導を振り返った内容から、教師の指導の意味とそれを効果的に展開するための手立てについて整理する。

5-1-1 教師の指導について

年少・年中・年長の成長段階（いまの姿）はそれぞれ異なり、実習生はそれを（比較することで）直に感じ取ることができると思う。教師が実習生に対して、子どもとかかわるに当たって望むことは、そうした違いをまず生活場面における、“できることやできないこと”などの子どもたちの具体的な姿からとらえ、必要に応じた働き掛けや実態に適した対応を考え、同時に、教師の姿から学んでほしいということと考えられる。

したがって教師は、子どもたちが日常的にできることを具体的に知らせることが必要で

あると考える。しかし、それらの姿をすべて伝えることは困難であり、実習生が、そうした子どもの成長の違いを意識的に学習し、自分なりにイメージを描いておくことも必要であるとする。このことを補う手立てとして、それまでの子どもや子どもの発達を理解するための学習内容を現実的な場面にシミュレーションして復習することや、上級生の実習での経験をエピソードを通して知ることなどが考えられる。

### 5-1-2 自己課題への助言について

実習生は、様々な実習場面や自分の動きを想定して実習に臨むが、実習開始直後は積極的に取り組みたいと思いつつもなかなか取り組めないということが分かった。その意味で、実際には、一通り5日間実習を行ってみて、少し教育現場が自分なりに理解できた段階で、もっと取り組みたいという気持ちが芽生えていたと考えられる。そして、理想と現実とのギャップを認識したことを通して、自分が今後の成長に向けての自己課題を設定することができたと考えられ、この段階で実習生が抱いた自己課題について、現場の教師と話すことで、課題の意味をより具体的（明らかな）にし、これからの実習（や準備）に前向きに取り組むことができると考えられる。ただし、実習現場での具体的な経験は、実習生にとって切実な問題（消極的なイメージとしての問題）となっていることがあり\*<sup>8</sup>、それが、次の実習に踏み出すための支障とならないような、助言が必要であるとする。（この意味で、基礎実習の事後指導における振り返りは、質的には応用実習の事前指導的な内容となる）

## 5-2 事後指導について

実習生たちが、教師による事後指導を振り返った内容から、教師の指導の意味とそれを効果的に展開するための手立てについて整理する。

### 5-2-1 教師の指導について

教育実習は、実習園・施設の子どものたちの生活に少なからず影響と変化をもたらすことになる。子どもにとって、実習生に興味をもったり喜んだりすることは、良い刺激として考えられるが、見知らぬ大人（学生）が生活に入ってくる（かかわってくる）ことによる環境の変化は大きいといわざるを得ない。教師は、実習生が単に遊んでくれるお兄さん・お姉さんという気持ちで過ごしたり、「たくさんの子ともとかかわることができた」という

\*<sup>8</sup> 実習生が子どもたちとかかわる中で、「嫌いだ」と言われてしまったことなど。

\*<sup>9</sup> 学生は、事前指導で、教師のこうした表現に留意している。この意味については、実習生は、子どもの生活を自分とのかかわりで、自分の課題として理解しようとするが、まず、本来は子どもの（実習生のいない）普通の生活で起きている問題として理解することが必要であるということと考えられる。例えば、実習生は子ども同士のトラブルの仲裁などに関心をもつが、実習生のかかわりではなく、普段どおりの生活のあり様から、その場の子どもの姿や生活を推測、また理解し、あえて、そうした場面を作り出すこと（あたかもいつもどおりであるように）が必要であることを意味すると考えられる。

ことだけに満足するのではなく、子どもたちとかかわったり一緒に遊ぶなかで、“子どもたちだけの生活(世界)へ戻してあげる”<sup>\*9</sup>ことが大切であるということを踏まえて実習に臨むことを願っている。その意味で教師は、実習生と一日を反省する際に、実習生が子どもとかかわる動きについて、気になったことや気付いたことを具体的に伝えたり、実習生に対して積極的にかかわろうとしない子どもへのかかわり方を助言をするなどして、実習が展開する生活場面であっても、あくまでも子どもが主体となるような(そういう理解をうながすような)助言を行うことが必要である<sup>\*10</sup>と考える。

### 5-2-2 自己課題への助言について

実習生の振り返りから、実習に対するイメージや意欲をもって臨んでも、実際に子どもとかかわってみると、子ども同士のケンカの仲裁や大勢の子から遊ぼうと声を掛けられたときの対応などに戸惑うことが多いなど、当初、思い描いていたイメージとは異なったことが多くあることが分かる。こうした戸惑いや疑問を教師との反省会で解決できたことはあるだろうが、それを十分に試すには5日間という期間は短いものであったと考えられる。そこで、附属幼稚園と大学が隣接するという環境を生かして、子どもと大学生とがかかわる機会を積極的に設けることが有効な手立てになると考える<sup>\*11</sup>。

### 5-3 教師の助言の意味について

大谷は、保育者養成校の学生の「幼児理解」について、経験等の違いに着目し、「I回生は、子どもの欲求・要求が分かることを理解できたことと認識している者や、『気持ちを理解する』ということの具体的な意味が理解できていない者もいる。それに対し、II回生は、『気になる子』に自ら積極的にかかわっていきこうという意欲が見られ、特徴を知った上で信頼関係を築き、その子に合った援助を行うという保育者としての意識に近づいている」と述べている<sup>\*12</sup>。そして実習などの保育現場における経験の積み重ねの中で、徐々に専門者としての意識や取り組みの姿勢等が見られるようになるという。だが、それは教育の現場で、実習生として、子どもとの個人的な関係から学んだことではなく、あくまでも保育という生活を通して学び得ることと考えられる。

大谷は、学生の「気になる子」への関心に焦点を当て「I回生よりII回生、II回生より

\*10 実習生は、実習施設における普段の生活の中に共にあり、保育という生活を教師や子どもたちと構成しているという存在として考えられる。その意味で、生活の中で特化された存在ではなく、学習者であり、生活者である。

\*11 実習期間の生活と様々な経験をとおして分かり始めることがあり、それを再度幼稚園での生活の中で、リアルに体感し、理解する機会を設けることが有効であると考えられる。そうした、再学習と再確認を通した、いわゆる学びの深化を図る環境としての視点から、附属幼稚園の活用や実習のあり方を考えることが必要である。

\*12 大谷彰子「二年制保育者養成校における実習での幼児理解-保育者との比較から-」『甲子園短期大学紀要31』甲子園短期大学。2013年。pp55-66.

保育者と保育経験を積んだ方が『気になる子』のことをより知ったうえで保育したいと感じている」ととらえている。そして、I回生の「学生は、目の前の子どもを理解しようとすることに一生懸命で、その子の家庭などの背景に考慮するところまで意識がっていないといえる」と、保育者との違いを述べ、I回生のかかわりを「『気になる子』を観察対象としてだけ見て」といると表している。

そうしたことは、例えば、「『先生嫌い』と言われ落ち込んでいたが…（そういうことを言われることは教師でもあり、次の日にはまた子どもは寄ってくる）…先生の話の伺い、落ち込まずに頑張ろうと思った。」（本研究：4-1-3（2））という、子どもの姿（言動）を、その背景や自己との関係性を踏まえた適切な理解ができずに、直接的（直覚的）に受け止めてしまっている学生の実習での理解の様子にも見ることができる。教師たちは、この学生に、そうした子どもをどの様に理解するのか、そして、言われた自分をどう解釈し、子どもとのそれ以降のかかわりをどの様に構築するのかについて助言しているが、これは、大谷のいう「I回生よりII回生、II回生より保育者と保育経験を積んだ方」の見方に基づく助言であり、言葉どおりの短絡的な受け止めに陥ることを防ぐ、子ども理解や保育観になるのだと理解することができる。そしてその助言は、より保育経験が豊かで、同時に実習生の立場（学習者であり、生活者であること）を理解できる教師によってこそ可能なことなのだと考えられる。このことから、学生が、限られた時間と機会の中で得た経験や抱いた心情、そして課題意識を、同じ生活の中にあつた教師と共に振り返ることで、それらに関することについての理解や解釈の仕方を学ぶことが必要であると考えられる。そしてさらに言うならば、実習生にとって、自分が考え、思うことについて教師にどの様に理解されているのか（受け止められているのか）について知ることができれば、実習生の学びは一層深まるのではないかと考える。

「4-2」では、実習生と隣接領域にあると考えられる初任教師が、大学での勉強・学習の内容が教育現場での実際と関係づけて考えられたことや、自己課題について、「子どもの姿」や「子ども理解」、そして「指導観・教師像」にかかわる内容を述べている。そして、それらを向上させたり、追求したりすることを自己課題（必要感）として述べており、それは専門者としての「人間観・生活観」にまでつながっていると考えられた。その後の安部による聞き取り調査においては、「現場でなければわからなかった・現場に入ってわかったこと」として「配慮が必要な子どもへの対応」をあげ、「子どもは、日常生活の中での片付けや荷物の始末など、生活習慣に関することが、今日できたとしても、必ず明日もできるわけではない。また、教師の対応や援助についても、前回うまくいった言葉掛けを次回行っても同じような結果になるとは限らない。子どもの体調や気持ちの変化によって日々態度が変わることがあり、それによって声掛けなどの対応や援助を変えていかなければならない。そういう点で、子どもとかかわることの難しさや援助の難しさを感じている」と語っている。初任である時期は、大学での学びを振り返り、生かしながらも、それだけでは対

応しきれない具体的で現実的な課題が多々あるという。初任教師にとって、幼稚園における子どもの日常は、自分が担任としてかかわる以前から開始しており、それまでの経験や習慣に遡って関与することは不可能である。そうした意味で、実習生もまた、すでに展開している生活や子どもの育ちの実態を理解し、その中で共に過ごすことの大切さに気付き、その意味を考えなければならないだろう。つまり、初任教師の回答に見られる、園生活における「かかわり・理解・教育観・教師像・生活観・人間観」に着目した自己課題の設定が必要になるのだと考えることができる。

また、同じ聞き取り調査で、初任教師は「現場の教師（先輩教師）から学び教わったこと」について、「社会人として、後輩は、先輩が気づくよりも先に仕事や掃除などやるべきことに気づいて、自分から動くことの大切さを学んだ。また、先輩も後輩も1人の対等な相手としてお礼を言ったり、間違ったときは謝ったりしている姿を目の当たりして、社会人としての人間関係の築き方などを学んでいる」と述べている。初任教師の自己課題は、特に、先輩教師とのかかわりで述べられてはいなかったが、「仕事や掃除」「動くこと」「お礼を言ったり」「謝ったり」などを、習慣や方法的側面からだけでなく、人間関係から理解している点において、そこで営まれ、築かれている生活や関係性にまず着目していると理解することができる。

これらのことから、実習指導においては、実習生が、園の生活や人間関係、そこに積み上げられ、展開している日常の様子に着目し、それらを理解すると共に感じ取ることを大切にするような指導が必要であると考えられる。

※ 本研究は、名古屋芸術大学人間発達学部2年生の、同大学附属クリエ幼稚園における実習の振り返りを手掛かりとしたものである。考察を結ぶにあたり、実習事前事後指導に中心となって当たられた本学准教授 南元子先生と、実習での学びや現場教師による助言を生かして丁寧に振り返りを行った学生の皆さん（考察資料の提供）、そして、実習生と実際に生活を共にされ、指導をいただいたクリエ幼稚園の教職員と園児の皆様（かかわりと実践）に、心から感謝を申し上げます。